

100年商品をめざす好機

世界最多の長寿商品が存在する日本

日本は数百年間という単位で存続している企業が世界最多であることを以前紹介した(『モラルBIZプレミア』令和三年二月号)。韓国銀行の調査(二〇〇八)によると、創業二〇〇年以上の企業は世界四一カ国に五五六社存在するが、三一四六社(五六%)は日本の企業ということである。二位のドイツが八三七社(二五%)であるから大差である。当然、そのような企業が提供している商品も長期に市場に存在することになる。

一方、社会にはFMCG(ファスト・ムービング・コンシューマー・グッズ:日用消費商品)と総称される対極の商品も存在する。日常生活で消費する食品や飲料以外に、衣料、文

具、化粧品などである。これらには共通の特徴がある。そのような商品を人々が購入する場所は地域に根付いた商店であったとしても、それらを生産し供給しているのは世界の市場に君臨する巨大企業を中心であり、地球規模で寡占が進行していることである。

巨大企業の上位はプロクター&ギャンブル(P&G)、ケロッグ、ジョンソン&ジョンソン、コカ・コーラ、クラフト・ハインツなどアメリカの食品や飲料の生産会社を中心である。これらの巨大企業だけではないが、新規の商品は次々と開発されて市場に投入される。二〇二二年に新規に日本の市場に投入された菓子は二六七三種、パンは一三〇七種、麺類は四二四種、清涼飲料は三二〇種、アルコール飲料は二六〇種という調査結果がある。

おかげ横丁にある江戸時代中期創業の「赤福」という和菓子店の名物「赤福餅」は伊勢神宮参詣の土産の定番となり、一九七五年にはフジテレビの土曜劇場で『赤福のれん』という題名の番組が放送されて有名になった。

高知市内にある和菓子店「西川屋老舗」は江戸時代初期の慶長年間に藩主山内一豊が入国して以来、幕末まで藩御用達であった老舗であり、その名物が小麦粉と砂糖と鶏卵を材料とする「ケンピ」である。北海道旭川市では一九一七年に創業した「高橋製菓」が発売した「ビタミンカステラ」が現在まで販売され名物になっている。当時の学校給食にはビタミンB1やB2が添加されており、この菓子にも添加して話題になった。

調味料にも長寿商品が存在する。イギリス発祥のウスターソースを日本で生産し、「イカリソース」という名前で一九九六年に発売した大阪の「山城屋」は戦後になって社名も製品と同名にし、添加物を使用

ここまで紹介してきたように、世界規模の巨大資本が次々と新規の商品を開発し、市場の占有比率を拡大していく経済構造が進展する社会において、日本が素晴らしいのは、世界最多の巨大ではない長寿企業が存在し、それらの企業が長寿製品を社会に提供していることである。それを証明するために、創業以来一〇〇年以上の歴史のある企業が一〇〇年以上の歴史のある商品を現在でも提供している事例を紹介したい。

日本に存在する長寿商品の数々

長野の小布施町に「小布施堂」という和菓子店がある。江戸時代からの旧家で、明治中期から新鮮な生栗を素材とした「栗鹿ノ子」という菓子を開発し、名物として販売してきた。同様に三重の伊勢神宮の門前の

しないソースとして有名である。一九九九年創業の「カゴメ」も一九〇八年からトマトを素材とするケチャップとウスターソースを発売し、工場見学や料理教室などの広報活動に注力し、西洋の味覚の国内定着に尽力してきた。

食品以外にも歴史のある商品は存在する。蚊取り線香の素材の除虫菊は明治初期にアメリカから渡来し、それを日本で栽培し「金鳥の蚊取り線香」として一九九〇年に発売したのが「大日本除虫菊」である。日本の書道人口は減少傾向ではあるものの、愛好する人口は二〇〇万人以上であり、利用されているのが墨汁である。明治時代の初等教育で必修であった習字で、子供が墨をするのに同情した教師が発明したのが「開明墨汁」である。

革新商品を開発する絶好の環境

ここに紹介した八種の長寿商品は共通の特徴がある。明治維新という激変する社会の空気に反応し、日

本伝統の商品であれ、西欧諸国から流入してくる商品であれ、文明開化の機運が充満する日本の社会に適應するように発明されたことである。もう一点は、当時としては中小というより零細と表現するのが適切な規模の企業が実現したことであり、結果として企業の多数の商品の一部ではなく、企業の主力商品として販売されてきた。

現在の日本は明治維新とは反対の方向であるが、巨大な転換が進行している。増大一方であった人口は減少に反転、成長一方であった経済も停滞している。平均寿命が約四〇歳であった若者国家は八〇歳超えの老人国家となっている。そこで想起したいのは社会の変化に対応して登場した一〇〇年商品は地方の零細企業が開発したものが大半という事実である。この構造に注目し、全国各地の中小企業が商品維新を実現されることを期待したい。



東京大学名誉教授
つきお よしお
月尾嘉男

昭和一七(一九四二)年生まれ。東京大学工学部卒業。工学博士。コンピュータ・グラフィックス、人工知能、仮想現実、メディア政策等を研究することも、全国各地で私塾を主宰し、地域の有志と共に環境保護や地域計画に取り組む。